

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 23 日現在

機関番号：13101

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2012～2014

課題番号：24720008

研究課題名(和文) 友敵論の系譜的再構築を基軸とした「情動のデモクラシー」に関する哲学的研究

研究課題名(英文) A Philosophical Research into the "Affective Democracy" based on the Genealogical Reconstruction of the History of Friendship and Enmity

研究代表者

宮崎 裕助 (Miyazaki, Yusuke)

新潟大学・人文社会・教育科学系・准教授

研究者番号：40509444

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の成果は、報告者がこれまで取り組んできたデリダ研究の成果を基盤としながら、それを発展させることによって「情動のデモクラシー」という独自の哲学的観点から、いくつかの哲学的な議論を練り上げたことである。その結果、「友愛」「情熱」「労働」「決断」といった概念についての現代の議論に多角的に貢献することができた。

研究成果の概要(英文)：On the basis of my studies on Jacques Derrida, this research elaborated some arguments from my own standpoint termed "Affective Democracy", and contributed to our contemporary debates on philosophical and political concepts such as "friendship", "passion", "labour", and "decision-making" from their various perspectives.

研究分野：哲学・倫理学

キーワード：デリダ 脱構築

## 1. 研究開始当初の背景

90年代以降、冷戦体制崩壊後のグローバル化に伴って、9・11テロ事件をはじめとした世界の政治的・宗教的・民族的な衝突は激化し続けており、最善の政治体制として信じられてきた「民主主義」という原理は根本から問い質されるようになった。事実、現代の社会・政治哲学のシーン全体にあって民主主義論は非常に盛んである(熟議的民主主義、対話型民主主義、共同体論的民主主義、リベラル民主主義、ラディカル民主主義、闘技民主主義など)。

他方、現代の政治哲学を特徴づける新たな視座として近年ますます注目を集めているのは、パトス—感情・情念・情動—の観点である。たとえば近年マーサ・ヌスバウムは、法の感情的な起源を問い直すことでアメリカ・リベラリズムの社会秩序の基層を解明してみせた(『感情と法』2004年)。実際、今日の民主主義の機能不全の一端は、高度に発達したメディア状況(携帯電話、インターネット、SNS等)に媒介された感情的ポピュリズムに起因するものであり、現代民主主義の原理は、旧来のロゴス(討議)中心主義の観点にとどまることなく、パトスの観点からこそ問い直されなければならない。

私見では、現代哲学にあってこの観点を「友愛」という政治的感情に注目することでいち早く打ち出していたのは、現代フランスの哲学者ジャック・デリダであった。報告者のこれまでの研究は、デリダの討議民主主義論に絞った考察に重点があったが、本研究は、先述した視座から民主主義論の全体を研究の中心に据え、デリダ特有の友愛論を政治的情動論の範型と解釈し直すことによって、「情動のデモクラシー」研究全体の枠組みへと再構成するという点に新たな目論見がある。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は「友愛」と「敵対」という概念対の再検討に基づき、政治的情動の働きを問う観点から、現代民主主義論の新機軸を打ち立てることである。友敵論は、古代(プラトン、キケロ等)から現代(シュミット、デリダ等)へと至るまで、哲学思想の長い歴史において継続的に問い質されてきた。だが奇妙なことに、この概念対が感情の原理を基礎としており、それこそが民主主義の根本問題であるという点が従来十分に追究されてこなかった。本研究は、応募者がこれまで取り組んできたデリダ研究の成果を基盤とすることにより、従来の民主主義の概念を「情動のデモクラシー」という独自の哲学的概念へと練り上げ、混迷を深めている民主主義論の現状に新たな展望を切り開くことを目指す。

## 3. 研究の方法

本研究は「友敵論」と「民主主義」という大きな主題を扱うにあたって、次の段階を積み上げてゆくにより達成される。第一に、デリダの民主主義概念が位置づけられる「友愛」の系譜学の把握と再解釈。これにより、デリダの民主主義概念の情動論的な意義が解明される。第二に、第一の成果をもとに、最新の研究等を活用しつつ、友愛のみならず、敵対感情を含めた友敵論の一般的な再構築。これにより政治的情動論の系譜学を描き出す。第三に、こうして把握された友敵論の歴史的射程が、いかなるアクチュアリティにおいて、「情動のデモクラシー」の可能性を開くものであるのかを追究する。

## 4. 研究成果

本研究の研究成果は、以下の二つの視点((1)、(2)、(3))から「情動のデモクラシー」論の基底およびその諸前提をなす論点を解明し、また、さらに三つの点((4)、(5))において、ジャック・デリダの思想に即しつつ「情動のデモクラシー」論の展開をなす論点を解明した点にある。

- (1) 第一に、政治的情動論の範型となるデリダの民主主義論に特有の論点を解明した。それによれば、9.11テロ以後の政治状況が一般にみと取られるように、「敵」のつくり出す暴力のイメージ、恐怖のイメージは、メディアというテクノロジーを介して切り取られ再構成されて、世界中に伝播し拡散する。それらのイメージは、人々に恐怖をかき立てる点で、テロリストたちが活用するものであると同時に、テロを根絶しようとしている者たちがメディアを介し、まさに恐怖という情動の出来事へと劇化し共有すべきものとしてつねに欲している当のものにほかならないのである。
- (2) 第二に「決断」と「情熱」。民主主義であれ資本主義であれ、近代の市民社会の制度は、質的に異なる特異な諸個人を均質化・数量化することで成り立っている。現代のデモクラシーにおける「決断」の論点のひとつは、私にとっての他者の存在を、「誰でもよい誰か」の偶然性のみならず「偶然的であるがゆえの必然性」としていかに肯定できるのか、という点である。デリダのキルケゴール論を手がかりとしつつ、この肯定性を、キルケゴールが信仰のうちに見出した「他者への情熱(Lidenskab)」として探究した。
- (3) 第三に「友愛」概念の系譜の再解釈。しばしばアリストテレスに帰される「おお友よ、友はいない」という言葉は、近代の校訂版によって覆されるにいたった。しかしデリダの再解釈が明らかにしたの

は、あらゆる友愛が、死者への呼びかけとしての哀悼の構造をもち、それがむしろアリストテレスからニーチェへと至る友愛の隠された伝統を形成するということであった。本研究はその論点を明確にすることにより、死せる友たちの記憶によって共同体とその政治が形成されてきた「情動のデモクラシー」の新たな論点を示すことができた。

- (4) 第四に「労働」と「言語」。ポストフォードイズムと呼ばれる現代の労働形態が複雑になるにつれ、労働の本質はますます言語によって規定されるようになる。資本主義のこの言語は、しばしば劣悪な環境で労働に従事せざるをえない労働者の「感情労働(やりがい)」を鼓舞するための言語としても現れる。他方、デリダが民主主義の条件として見出したひとつの要点に「すべてを言う権利」としての言語の無条件性がある。言語活動のこうした無条件性の観点から、資本主義経済による感情労働の搾取という実態を批判的に考察し、労働の民主化の条件を模索した。
- (5) 最後に「国家創設」行為について。本研究が、情動のデモクラシーの基礎をなす根本問題として行き着いたのは、国家や共同体を創設する立法行為の問いであった。デリダのアメリカ独立宣言論は、この問題に、ひとつの言語行為論的な説明を与えており、なおかつ、言語行為論の限界を指摘するかたちで、命名や署名の反覆可能な構造における謎を明らかにした。本研究は、この論点をあらためて追究することにより、情動の共同体を媒介する「固有名の効果」というさらなる論点への道筋をつけることができた。

上記の点に付帯する成果としては、デリダの重要だが未邦訳にとどまっていた独立宣言論を日本語に翻訳・紹介し、デリダ研究の基礎資料的な次元での貢献をすることができた。また、初期デリダの研究に欠かせない、フランスの哲学者ジェラルド・グラネルの古典的なデリダ論も翻訳・紹介することができた。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計8件)

- 1) 宮崎裕助「呼びかけとしての友愛、哀悼としての友愛—ジャック・デリダの友愛論におけるアリストテレスの伝統について」『現代思想』第43巻・第2号(2015年2月臨時増刊)青土社、256-267頁。査読無(依頼原稿)。

2) 宮崎裕助「国家創設のパフォーマティブと署名の政治—ジャック・デリダの「アメリカ独立宣言」論」『思想』第1088号(2014年12月)64-87頁。査読無(依頼原稿)。

3) 宮崎裕助「ジャック・デリダ—職業(プロフェッション)としての言語行為」『POSSE』第22号(2014年3月)堀之内出版、230-245頁。査読無(依頼原稿)。

4) 宮崎裕助「限定的ミメシスから全般的ミメシスへ—ジャック・デリダ『散種』を読む」『思想』第1078号(2014年2月)岩波書店、94-105頁。査読無(依頼原稿)。

5) 宮崎裕助「「決断の瞬間はひとつの狂気である」—ジャック・デリダのキルケゴール『おそれとおののき』読解」『現代思想』第42巻・第2号(2014年2月)青土社、52-66頁。査読無(依頼原稿)。

6) 宮崎裕助「弁解機械作動中—ルソーの「盗まれたリボン」をめぐるポール・ド・マンとジャック・デリダ」『思想』第1071号(2013年7月)岩波書店、101-127頁。査読無(依頼原稿)。

7) 宮崎裕助「法のテキスト/テキストの法—ポール・ド・マンにおけるルソー『社会契約論』のキアスム読解」『現代思想』第40巻・第13号(2012年10月)青土社、190-206頁。査読無(依頼原稿)。

8) 宮崎裕助「自己免疫的民主主義とはなにか—ジャック・デリダにおける「来たるべきデモクラシー」論の帰趨」『思想』第1060号(2012年8月)岩波書店、45-68頁。査読無(依頼原稿)。

〔図書(共著)〕(計4件)

1) 『労働と思想』市野川容孝・渋谷望編、堀之内出版、2015年：担当箇所、249-272頁。

2) 『感性学—触れ合う心・感じる身体』栗原隆編、東北大学出版会、2014年：担当箇所、「自然の多様性と美のかたち」171-189頁。

3) 『感情と表象の生まれるところ』栗原隆編、ナカニシヤ出版、2013年：担当箇所、「学問の起源とミメシスの快」70-90頁。

4) 『世界の感覚と生の気分』栗原隆編、ナカニシヤ出版、2012年：担当箇所、「美的情動のアンビヴァレンス—カント、シラー、美学イデオロギー批判」244-262頁。

〔学会発表〕（計10件）

- 1) 宮崎裕助「カントの大学論をめぐる検閲と秘密の問題」愛媛大学法文学部人文学科・新潟大学人文学部学術交流講演会「哲学と大学、学問」、2015年3月20日、愛媛大学法文学部大会議室。
- 2) Yusuke Miyazaki, “Arendt on the Aesthetico-Political Judgment,” Rodolphe Gasché’s Seminar at Komaba, University of Tokyo, Nov 25, 2014.
- 3) 宮崎裕助「美的情動批判 ポール・ド・マンの美学イデオロギー論再考」社会思想史学会第39回大会「社会思想としての批評 その可能性/不可能性をめぐって」2014年10月25日、明治大学駿河台キャンパス。
- 4) 宮崎裕助「ミメシス、エコノミメシス カント/デリダにおけるミメシス論の脱構築」エコノミメシスR&D第5回ワークショップ、2014年5月17日、日本女子大学目白キャンパス。
- 5) 宮崎裕助「哲学、国家、検閲 カント『諸学部の争い』をめぐる権力と秘密の問題」カント研究会280回例会、2014年4月27日、法政大学92年館。
- 6) 宮崎裕助「決断の瞬間は狂気である」デリダのキルケゴール論をめぐる、キルケゴール生誕200年記念ワークショップ「現代思想の源泉としてのキルケゴール」、2013年11月30日、高崎経済大学図書館ホール。
- 7) 宮崎裕助「芸術の過去性と物質性 ポール・ド・マンのヘーゲル美学読解における記憶の問い」、表象文化論学会第8回研究発表集会、企画発表パネル「ポール・ド・マン没後30年」、2013年11月7日、東京大学駒場キャンパス18号館。
- 8) 宮崎裕助「ジャック・デリダとポール・ド・マン もうひとつの脱構築をめぐる」第1回脱構築研究会「ポール・ド・マンと脱構築」2013年8月3日、一橋大学国際研究館 4F大教室。
- 9) Yusuke Miyazaki, “The Necessity of Questioning on the Machine: A Comment on Nicholas Royle’s ‘Poetry, Animality, Derrida’” ニコラス・ロイル講演会、早稲田大学文学学術院表象・メディア論系、早稲田大学・政経学部 1号館401教室、2013年2月28日。
- 10) Yusuke Miyazaki, “Affective Life in the Autoimmunity of Democracy: Toward Derrida’s “Biopolitical” Thinking,” 3rd DERRIDA TODAY conference, University of California, Irvine, USA, 2012年7月13日

〔翻訳〕（計4件）

- 1) ジェラルド・グラネル「ジャック・デリダと起源の抹消」宮崎裕助・松田智裕訳、『世界の視点—知のトポス』第10号、新潟大学大学院現代社会文化研究科、新潟大学人文学部哲学人間学研究会、2015年、215-253頁。
- 2) マイケル・ナース「デリダ最盛期」宮崎裕助・島田貴史訳、『現代思想』第43巻・第2号（2015年2月臨時増刊）青土社、40-58頁。
- 3) ジャック・デリダ「アメリカ独立宣言」宮崎裕助訳、『思想』第1088号（2014年12月）岩波書店、52-63頁。
- 4) ポール・ド・マン「ジャック・デリダ『グラマトロジーについて』のルソー読解」宮崎裕助訳、『現代思想』第40巻・第13号（2012年10月）青土社、184-189頁。

〔その他〕（計6件）

- 1) 宮崎裕助「ポスト・デリダに向けて」（藤本一勇氏、西山雄二氏との鼎談）『週刊読書人』2015年2月20日・第3078号。
- 2) 宮崎裕助「ジャック・デリダ著作目録2014」（島田貴史氏との共著）『現代思想』第43巻・第2号（2015年2月臨時増刊）青土社、361-373頁。
- 3) 宮崎裕助「デッドレターとしての哲学」（東浩紀氏へのインタビュー）『現代思想』第43巻・第2号（2015年2月臨時増刊）青土社、116-138頁。
- 4) 宮崎裕助「10年後のジャック・デリダ」（鶴飼哲氏、西山雄二氏、國分功一郎氏との座談会）『思想』第1088号（2014年12月）岩波書店、11-51頁。
- 5) 宮崎裕助「ジャック・デリダ『プシュケー他なるものの発明I』藤本一勇訳（岩波書店、2014年）書評」『週刊読書人』2014年9月12日、第3056号。
- 6) 宮崎裕助「「借りの礼讃」と贈与の出来事 ナタリー・サルトウ＝ラジュ『借りの哲学』から考える」『atプラス20』太田出版、2014年、20-29頁。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

宮崎 裕助 (Miyazaki, Yusuke) 〔新潟大学・人文社会・教育科学系准教授〕

研究者番号：40509444